

ウィリアム・テンブル著『キリスト教と戦争』

—全訳と考察—

川島 創士

Kawashima, Soshi

目次

1. 序論
2. 全訳:ウィリアム・テンブル著『キリスト教と戦争』
3. 『キリスト教と戦争』にみるテンブルの戦争論とその背景
 - 3.1 背景
 - 3.2 『キリスト教と戦争』でのテンブルの主張の概略
 - 3.3 ベイントンの類型論
 - 3.4 テンブルの戦争論
4. 結論

1. 序論

本稿は、英国教会の神学者であり、後にカンタベリー大主教にもなったウィリアム・テンプル (William Temple, 1881-1944) が 33 歳の時に執筆した『キリスト教と戦争』の全訳およびテンプルの戦争論の考察である。1914 年に開戦したといわれている第一次世界大戦を経験する中で、当時の英国教会の人々は自らの神学を問い、国民との関わり方を問うてきた。この第一次世界大戦を前後して、その後の英国教会の神学史に多大なる影響を及ぼした運動がいくつか生起していることは特記すべきであろう。たとえば、1916 年に戦時下において国民の不信仰に対して伝道を行うと同時に、英国教会自らが新たな使命を自覚するための運動である「悔悛と希望の国民伝道」(National Mission of Repentance and Hope) 運動や、その反省をふまえたうえで、教会の改革を促した新たな試みである「生活と自由」(Life and Liberty) 運動などは戦時期における教会の様子を知るうえで重要である⁽¹⁾。ここに訳出した『キリスト教と戦争』はそのような戦時期の著作物の中でも初期に刊行されたものであり、上の二つの運動にも関わったテンプルの当時の思想を理解する際の最良の資料である。そこで、まずは未だ翻訳されていない『キリスト教と戦争』の全訳を試みたい。本来ならば、先にあげた「悔悛と希望の国民伝道」運動や「生活と自由」運動も含めた考察が必要であるが、今回は特にテンプルの初期の思想の考察に力点を置くため、主なテキストとしては『キリスト教と戦争』を用いることにする。それをとおして、第一次世界大戦下におけるテンプルの戦争理解の一端に触れてみたい。

2. 全訳：ウィリアム・テンプル著『キリスト教と戦争』

注釈

英国は、われわれが信じているような、国民にとって名誉ある退却の道はないと思われる戦争に携わっている。祖国を愛する全ての人の望みは、祖国の緊急時に祖国に奉仕することであり、その奉仕の中で死んだ

者たちが無駄死にならないために、生きて労働することである。緊急の義務を明確にするにはこれで十分かもしれないが、戦争は最も深い意味において、キリスト教の思想への挑戦であり続けている。何世紀にわたって洗礼名をつけてきた諸国民の間で現在行われている悲惨な戦争は、キリストについての諸原理を理解し、それを人間の事柄に適応することがどれほど難しいかを示している。

この一連の論考は、共通の思想、討論そして祈りによって、キリスト教の意味と個人や社会、世界に対する教会の働きについて、真の理解に到達しようとする試みの一つである。

この論文集の発行を推進する人々は、さまざまな政党やキリスト教団体から集められている。彼らは、表現に多様性を持たせることによってのみ、自分たちが求める真実に到達できると信じている。そのため、どの論文の意見についても、単独で責任を負うことはない。なぜなら、キリストとその福音にこそ救済の希望があり、社会と国民生活の健全性がある、という確信において彼らはひとつだからである。

キリスト教と戦争

異教化した世界でキリスト者は何をすればよいのだろうか？というのも、この世界は異教化しているからである。キリストの体の構成員は相互に涙を流し、かつてゴルゴダで流血したのと同じように、キリストの体は流血している。しかし、今度はキリストの友人によって傷つけられている。まるで、ペトロが釘を打ち込み、ヨハネが脇腹を刺したかのようである。

しかし、少なくとも私が理解する限り、我が国民が戦争を宣言したのは正しく、国民の呼びかけに応じて戦っている人々は正義のために戦っており、兵士になる以外に奉仕する方法のない正義なのである。

ここには、難問となる十分な理由がある。批判する者は、キリスト教が崩壊してしまったとさえ言おうとし、キリスト教の破綻が告白される。しかし、われわれは少なくともそれに反論することができる。この戦争

は、キリスト教の破綻を意味しているのではなく、実際には、キリスト教による世界の征服の過程で大いなる進歩を意味している。なぜなら、この戦争は、戦争がわれわれの宗教の破綻をしるしているとな多数の人が述べた最初の戦争だからである。換言すれば、各国がキリスト教を信仰していれば戦争は起こらなかった、ということを経ヨーロッパが再び知ったのは今になってのことである。そのことは、アタナシウスやテルトゥリアヌスや原始教会には十分に知られていたことだが、コンスタンティヌスの時代から今日に至るまで、忘れ去られている。コンスタンティヌスの改宗として知られる出来事で、世界が教会をその保護下に置き、その支配の大部分を得たとき、福音の原則の多くが不明瞭になった。何世紀もの間、教会は陸軍や海軍を祝福する用意ができていた。シェイクスピアは、ヘンリー五世にフランスへの宣戦布告を進言する人々の中に明らかに主教たちがいることが明らかだということが分かった。しかし現代では、あるローマ教皇が武器を祝福するよう求められたとき、「私は平和に祝福を与える」と答えたと伝えられている。また、ある大主教は、もう一つの世界の教皇と言い、すべての戦争は「悪魔の所業」であると厳粛に宣言している。それは重要な気づきである。というのも、キリスト教が国際関係に適用されたことは一度もなかったからだ。崩壊したのは、キリスト教的でなかった文明なのである。

しかし、この知識は同時に、市民として、またキリスト者として、つまり英国という国家の一員であると同時にキリスト教会の一員であるわれわれの義務について、さらなる光を求め、考え、祈るの必要性を含んでいる。そのような考えと祈りのための指針を有益と思われるすべての人々に提供することが、この一連の論文の目的である。

われわれに緊急に迫っている問題は、主に三つのグループに分けられる。

1. キリスト者は実際の宣戦布告と軍隊への招集に関してどのような立場を取るべきか？
2. キリスト者は戦時中にどのように行動すべきか？

3. 戦争勃発の結果として、キリスト者の注意を惹きつけるような理論上・実践上の主要な問題とは何か？

この最初の論文の目標は、これらの問いを整理して、そのうえで前に進めようとすることである。それは、解決策を述べるよりも、問題点を明確にすることに重点を置くことになるだろう。解決策は、続編で示すつもりである。

I. 宣戦と軍への召集

この問題に関しては、思慮深いキリスト者たちが完璧な誠意を持って採用しているさまざまな態度があるように思われるが、そのどれもが当惑を生じさせる。われわれが最初に考えたいのは、自らの目的は正義であると信じて、覚悟のうえというだけではなく、喜んでその目的で殺人をするために、あるいは、殺されるために戦場に赴く人である。そのような人は、自分が正義であるがゆえに敵は悪であると主張する必要はない。というのも、悲劇のほとんどは、ある正義と別の正義との闘争から生じることに気がついているはずだからである。その人にとって、祖国の正義を支持するには祖国が自分を必要としているということでも十分であり、その人は喜んで兵役に就く。その人の力がその決定に影響を及ぼす場合には、宣戦するためにその力を利用する。なぜならば、正義であると自ら信じる目的に奉仕するには、それ以外の手段はあり得ないと確信しているからである。

この点においてその人は間違っているのだろうか？キリスト者の英雄的行為のほとんど—あるいは少なくとも、記録されたキリスト者の英雄的行為—は、この形態をとったのではなかったか。彼を批判するのは不可能だろう。しかし、キリストがそれを得ようとして戦おうとしなかったという彼の目的ほど、これまでに正しい目的はなかった。それは、この世界の諸国家の目的が物質的であるのにキリストの目的は霊的であったためなのであろうか？もしそうだとしたら、霊的なものは物質的なものをどれ程支配するだろうか。あるいは、もし神の国に最善の人間のほ

とんど全ての人々に前線に立ちたいと思わせる冒険心や義務感に機会を提供するような戦争が存在しないならば、神の国はこの素晴らしい熱意のために別のはけ口を提供しうるだろうか？

ここには十分な問題がある。現在のわれわれの目標は、それらを述べることだけである。可能な答えに向けた提案は、本稿の後半で述べるかもしれない。

別の立場であるが、ある人が属する国民にとって、あるいはその人自身にとって状況が戦争を義務づけたのであるが、それは忌まわしい義務であると考える人がいる。そこには陽気さもなければ勝利の歓喜もなく、辛い義務感が存在する。この立場は、前の立場ほど問題を引き起こさないが、イエス・キリストが戦場に入ったり、弟子たちにそうするように命じたりすることをわれわれが思い描くことができるかどうかを問わなくてはならない。場合によっては—この場合には—戦争は義務ではないのか？と。

これはさらに三つ目の立場やキリスト友会やトルストイの名前と結びついた教義に結びつく。そして、この教義の合言葉は、「無抵抗」や「悪に抵抗するな」である。しかし、われわれはキリストの教えを彼の行動によって解釈しなければならない。キリストは物理的に抵抗しなかったが、彼は時代の悪に抵抗し、死に至りさえした。キリストは、「エルサレムの人々は非常に頑固である。つまり、ガリラヤでは群衆が福音を待ち望んでいる。だから、ここでわれわれは平和に働く」とは言わなかった。それどころか、「彼はエルサレムに上って行こうと堅く決心した」。キリストは戦いを避けようとせず、戦いの中へ入っていった。しかし、彼は武器を持たずに戦いに入り、ペテロに剣を鞘に収めるように命じた。これが、キリスト教国家にとっての真の行動指針なのであろうか？「無抵抗の代償」は何だろうか？他の諸国民が苦闘し、われわれが必然的に他の諸国民の貿易と商業を横取りする間に、動かずにじっとしていることは、十字架の道ではないとわれわれが言うとするれば、全ての友人は確実にわれわれに合意するだろう。平和が、単に戦わないことだけを意味

するのであれば、戦争よりもはるかにキリストの精神からかけ離れたものになろう。

これらの複雑さは、次の二つの結論のうち、どちらか一方を示している。すなわち、一方は、キリストの規範は個人と個人の関係に適用可能であって、国家には適用できないという結論である。他方は、正義と呼べるようなことを単独で実行するのをしばしば不可能にしてしまうような罪のもつれが存在し、したがって、それ自体悪であることを実行するのが義務となるという結論である。これらの疑問について、われわれは立ち戻らなければならない。

II. 戦時下におけるキリスト者の行動

戦争は事実上、宣戦布告され、その恐怖は昼も夜もわれわれの目の前にある。その時、キリスト者はどのように振る舞えばよいのだろうか？「あなたの敵を愛しなさい。あなたを罵る者を祝福しなさい。悪意を抱きながらあなたを利用して虐げる者たちのために祈りなさい」。敵を憎み、敵が持つ悪を信じ、報復し、敵に災いがあるようにと祈ることは自然なことである。他の箇所と同様、ここでもキリストの宗教は—自然そのものは別として—自然と思われるものの否定である。

現在の事実からいくつか例を挙げてみたい。私は、ドイツ兵が残虐な行為に手を染めたことに疑いの余地はないと思う。しかし、マスコミの大部分は、憎悪の欲望を満足させ、それを強めることだけを（明らかに）目的として、そのような話を集めることに喜びを感じているように思われる。あらゆる手段によって真実が語れるようにしなさい。われわれの敵に対しては、証明された真実以外は何も語ってはならない。

キリスト者は決して報復を望まないだろう。キリスト者は「目には目を」が自らの掟ではないことを知っている。キリスト者は決して潰そうとしたり、辱めようとしたりしない。なぜなら、敵もまた神の子であり、神は敵にもわれわれと同じ目標を持っておられ、われわれに対してと同様に敵に対しても、同じ愛を有していることを知っているからである。

キリスト者は「征服」を望んでいるのではなく、すべての闘争を通じて、普遍的な教会の調和の中ですべての国民に十分な地位を与える和解を思い描いているのだ。われわれは公法を支持して、この戦争に参戦した。われわれの利益が損なわれたのであれば、われわれの名誉も損なわれた、ということのをわれわれは主張してきた。われわれは誇示を求めないと言ったはずである。いわゆる「ドイツ貿易戦争」は、軍事戦争の一部とみなすことができる。食料であれ工業の原材料であれ、補給を断つことは、包囲や投資の一形態である。しかし、この戦争を擁護し、可能な限り戦後もドイツ市場を維持しようとすることは、プロイセン・システムにおけるもっとも嘆かわしい特徴と考えられるものと同じ形態の攻撃性である。

キリスト者は自らの全ての行いにおいて、悪に加担することを後悔する。私はすでに、英国が当時、戦争を宣言したのは正しく、厳粛にそうする義務があったということ述べてきた。当時は、それがわれわれのなすべき唯一に正しいことであった。しかし、なぜそのようなことが生じてしまったのだろうか？戦争を促進するために、また、平和のために努力するドイツ人たち— 社会的な民主主義者やその他の人々 —と協力するために、われわれは全力を尽くしただろうか？われわれはプロイセンの侵略史や、ニーチェ、トライチュケ、そして、バルンハルディの著作、さらにはベルギーの中立侵犯は指摘する。しかし、たとえドイツ人の目の中に梁があり、われわれの目の中に塵があるだけだとしても、そこに塵があることをわれわれは否定できない。そして、それは塵だけであろうか？英国の歴史と地勢が、われわれを軍事的ではなく商業的にした。しかし、われわれの産業制度においては、他国のどの国も経験したことのないほどの略奪と攻撃の精神、弱者への抑圧、成功の称賛を解き放ってしまった。これは、軍事的形態でのプロイセンの邪悪な気風とわれわれが考える精神と同じものである。われわれは、そのような軍事的形態の中で戦わなければならない。しかし、われわれは懺悔の中で、またあらゆる形態でのその気風を、われわれ自身の中から追い出す決意の

うちに、戦わなければならない。

キリスト者は何よりも、自分の敵のために祈る。われわれは「あなたがたを憎む者たちに、教訓を教えてから善を行ない、あなたがたを迫害する者たちが傷ついたときには、その者たちのために祈りなさい」という古い言葉を書き換えるか、あるいは、行動においても祈りにおいても、敵に対する態度をすべて変えるかである。おそらく、今、ドイツのために祈るように求められたとしたら、大多数の人が、その意図はドイツの武器が勝つように祈ることだと思うだろう。しかし、ドイツ人たちがわれわれの祈りを必要としていることは確実である。彼らに対して一般に向けられている非難が正当であれば正当であるほど、われわれが彼らのために祈ることはより必要である。もし、英国が真の信仰を持つとすれば、力と力の不毛な協議よりも、交戦中の諸国民とその支配者たちに聖霊を注ぎ込むことによって、この戦争を止めさせることができるという考えにあえて疑問を抱くだろうか？ 共通の信仰を表明し、われわれの意志ではなく神の意志の実現に向けられた（全ての信仰の祈りはそうでなければならない）祈りの力は、教会がこれまでほとんど活用してこなかった力である。

Ⅲ. 戦争によって生じた諸問題

この戦争によって提起されているわれわれの宗教生活や教義全体に関する諸問題は、ほとんど数限りなく存在するように思われる。戦争はわれわれの信仰全体に対する挑戦である。われわれはどのようにしたら、神の全能の愛をなおも信じていることができるのだろうか？ 悪の問題—究極の宗教的問題—は、戦争をキリスト教の最終的な過ちであるとみなす人々によって認識されるように、最も鋭い形でわれわれの前に投げ出されている。しかし、戦争はその問題を、他の多くの出来事よりも、より鮮明に、より純粋に浮かび上がらせるだけである。

ある重要な問題は、国家はそもそもキリストの法に従うことができるのか否かという問題である。自己犠牲は共同体に適応した時に何か意味

を持っているのか、また、もし意味を持つとすれば、それは美德であるのか？「自己犠牲を行う個人」という語句における意味の他に、「自己犠牲を行う共同体」という語句には何か意味があるのか。というのも、ベルンハルディのプロイセンでさえ、そのような共同体だからである。そして、もし一つの国民において自己犠牲が正しいとすれば、政府はその国民を苦痛に満ちた美德に関わらせることが可能なのか？後半で、これらの疑問は追及されるだろう。ここでのわれわれの目標は、それらの疑問を指摘し、注目されるべきであると主張することである。

キリスト教の法は国家に適応不可能であるという理由で、あるいは、従来の当該国家はそこまで高まっていないという理由で、国民がキリストの法に従わないとすれば、個々のキリスト者は何ができるのか？個々のキリスト者は、基本的なキリスト教の原則と一致して行動する義務があり、キリストが暴力を使うことを拒んだために、個々のキリスト者も同様に行動しなければならず、それゆえに、全く正当な目標を守るためであっても、一人のキリスト者が武器を取ることは不可能であると考える人々がいる。これらの信念を正直に信奉する人々は、もっとも高い尊敬を受けるに値する。国民は彼らなしには悪を行うことになる。世界の進歩は、全ての妥協を拒否し、大胆にその理想に到達しようとする人々によるものであった。もし、自らの認識したキリスト教の原則を、国民的利益の要件を含む、他のいかなる要件よりも上位に置く用意のある人々がいなければ、国民はキリスト教信仰の高さと深みを見失う危険性がある。

しかし、キリスト者の大多数は、このような立場を取ることに抵抗を感じ、それが福音の正しい解釈であるかどうかを疑っている。キリストは霊的な王国の基礎を築いたが、物理的な暴力の使用は、キリストの目的全体を敗北させてしまったはずである。しかし、霊的な力の自由な行動を保証するために、悪人を阻止しようとして暴力を用いることは許されないだろうか？もし、我が国民の多くがすでに言及したような諸原則に基づいて行動することになれば、現在の戦闘における英国の力は激し

く弱体化し、事態が不利になることは明白である。もし、国民全体が無抵抗の方針を受け入れる覚悟をして、この災難を神は善なるもののために覆すことができるという確固たる信念を持つとすれば、無抵抗の方針を採用するのは少なくとも可能になる。けれども、国民にはそのような覚悟はない。いずれにしても、戦争は継続するであろう。そのような方針をとった場合の唯一確実な結果は、英国が目指している目標の敗北であろう。その目標の勝利を英国のキリスト者たちは人類のためであると信じている。また、その目標の敗北は、人類の最良の利益とは敵対する諸勢力の勝利となろう。同胞が現在戦っている英雄的な犠牲は無駄になってしまうであろう。このような事実や、同胞が懐いている国民との一体感の結果、キリスト者の大多数は、国民が戦っている戦闘においては国民に対して最大限の支持を与えるのが自らの義務であると感じている。このような態度をとる場合、彼らはキリスト教の諸原則を傷つけているとは感じていない。国民は真の実在を有している。個人と同じく、国民は、神の王国に寄与すべきものを持っている。個人は全く一人で生きることにはできない。国民は誤解されて、卑しい情念に仕えさせられる可能性があるということは、このような立場の妥当性に影響することはない。

とはいえ、先に私が罪のもつれと呼んだものに、われわれは巻き込まれているようだ。おそらく、これがわれわれの学ぶべき偉大な教訓のひとつである。良い木だけが良い実を結ぶことができる。8月4日に英国が、当時も今も、いかなる英国人もキリストの精神と完全に一致して行動することは不可能であった。キリストは罪深い世界の中で神聖な生活を送った。それは奇跡であった。しかし、われわれにはできない。キリストの体、キリストの意志の器官であるのは、個々のキリスト者ではなく、教会全体である。全ての諸国民の栄光と名誉がその中に注入されて初めて完成された教会が、キリストの意志の完成された組織であり、キリストの完全さの名声の秤なのである。罪深き人間は、キリストの人生を生きることはできず、罪深き国家はキリストの法に完全に従うことは

できず、また、罪深き国家の国民は、国家の罪から完全に逃れることはできない。疑いなく、このことは卑しい人々によって自らの卑しさの言い訳として弁明されるだろう。しかし、キリスト者は自らでは破壊できない鎖に結ばれ、縛られているという事実をいよいよ思い知らされる。「私は惨めな人間である。誰が私をこの死の体から解放してくれるだろうか」というのも、われわれのなし得る最も正しいことでさえ邪悪な場合には、われわれが選択を余儀なくされたことは、罪の恐るべき結果である。より大きな悪とより小さな悪との間の選択である。また、より小さな悪を選択することにおいてわれわれが正しいとしても、また、絶対的に正しいとしても、それは依然として悪である。というのも、それはなお神の聖なる意志への完全な服従ではないからである。

少なくとも、戸惑う良心にはそのように思えるだろう。また、そこから逃れる手段は、われわれに課せられた重荷を担うことを拒否することによるものではなく、その重荷を懺悔の中でより深い信仰のための祈りとともに担うことによるものである。

IV. 普遍的教会の必要性

多くの疑問がある中で、もうひとつ、ここで提起されなければならないことがある。個々の国民が信仰の平均レベルを超え、仲間を引き上げる力以外に、国家の進歩的手段はないように思われる。ある程度はキリストの賜物の尺度に従って、それぞれの時点に応じて実行することができる。しかし、全体的に見れば、人間は社会的な影響に反応するものであり、個人的な達成能力を完全に覆い隠してしまう。そして、国民的な立場よりも高い立場に立って、より広い忠誠心によって生きる力は、ごくわずかな者にしか与えられていない。国民国家は至高の現実性であり、それゆえに忠誠心の至高の対象であるとするベルンハルディの主張には、かなりの影響力がある。また、それは国家には全く義務がない（なぜなら、仮定上、そのような義務が働くような諸国家の集まりは存在しない）という邪悪な教義へと真っ直ぐにつながるのである。しかし、われわれ

には天の国と教会以外にはそれに対抗するものは何もない。前者はこの世にはなく、理想的で、(少なくとも歴史的には) 事実ではないし、後者は単一でも普遍的でも神聖でもない。

われわれが必要とするのは、現実的にも認知的にも一つで、キリストへの崇敬によってまとめられた単一の国際社会である。もし世界にそのような国際社会が存在するならば、個々のキリスト者は自らの国家に属しているのと同じような仕方、その国際社会にも属していると感じるだろう。それに対する忠誠心は、多くの善人がユートピアとして軽蔑するような、また、その価値についての善人の潜在的な疑問によって無効にされるような努力ではないだろう。そのような社会は、その構成員をその社会に結びつけることによってキリストの理想に少しでも近づき、自らの祖国を彼らとともに歩ませようとする彼らの希望を大いに助けるだろう。

かつて冗談半分で提案された信経にある言葉を付加し、「私は聖なる普遍的教会の存在を信じ、それが存在しないことを残念に思う」と言うべきだという提案は、われわれの問題の核心に非常に近い。今起きている全ての恐怖は、キリスト教世界の一致のために苦勞する人々にとって新たな拍車となる。

かつてはそのような社会は存在した。古い教皇制度の支持者たちが理解したような古い教皇制度は、人が一般に行おうとした最も崇高な理想であった—志において最も崇高で、論理において最も確実であった。しかし、中世の栄光と失敗であった無謀な観念論とともに、それは近道によってその目的地に到達しようと試みた。それは、神の目的のためにこの世の手段を利用した。それゆえに失敗した。しかし、もし当時の野蛮なヨーロッパ人がたとえ一時でも、神聖な社会が国民的な区分を超越するという理想を理解し得たならば、われわれは何世紀もかけて達成されたより深い理解をもって、そのような社会が再び築き上げられることを望んでいる。

われわれの希望は存在する。戦争がないという意味での平和は、一定

期間、商業的あるいは金融的利益によって保証されるかもしれない。しかし、平和よりも戦争の方が崇高な場合がある。世界にとって唯一の真の平和、愛と喜びの双子である平和、聖霊の贈り物である平和とは、全ての諸国民と全ての人種を、地上に実現される一つの神の国の一部として認めることにある。

したがって、この戦争はキリスト者に対する思想、懺悔、行動に関する挑戦である。本稿では、その問題点の概略を述べたにすぎない。別稿が、その問題の解決へとわれわれを導くだろう。そして、われわれが困惑に苦しんでいる間、真理を不完全なものとしてみることによって、しばしば意見の相違が生じるだろう。

しかし、すべてのキリスト者は、時局が求める政策において意見の相違はほとんどなく、一致することができる。キリスト教会の責務は明確である。教会は、戦争の遂行においてわれわれの敵に対する名誉や寛大さ、愛というキリスト教の諸原則が忘れられないように努めなくてはならない。また、和解が生じたときには、その和解が神の国の建設のために全ての諸国民に必要であるというキリスト教の諸前提と一致すべきことを保証しなくてはならない。また、われわれ自身の祖国は、敗北においてであれ、勝利というより厳しい試練においてであれ、その心と精神を開いて神が教える教訓を学び、そして、自らの最高の使命は神の意志を発見し、それを行うことであると認識しながら、神の定める未来へと進むべきである。

3. 『キリスト教と戦争』にみるテンブルの戦争論とその背景

3.1 背景

第一次世界大戦が勃発した時、英国教会にはいくつかの戦争論があった。以下では、まず、第一次世界大戦当時の戦争論を類型化し、その背景を概観する。その後、テンブルの戦争論の考察に入りたい。

第一次世界大戦当時の英国教会の聖職者の中には、戦争を「神の裁き」として捉える見方があった。これは、Martin の分析によれば、日曜日

の礼拝への出席減少と反比例する形で、酒浸りや不道徳また、売春や離婚率などが増加していた当時の社会的背景に起因している。二十世紀の英国社会は、唯物論的で、工業化し、世俗化した文明によって培われた「進歩への信仰」が神への信仰に代替された時代でもあった(Martin 1974, 82-83)。このような不信仰な様子は、従軍チャプレン(The Military Chaplains)が報告した戦線の兵士の様子にも現れている⁽²⁾。付言すれば、第一次世界大戦中のこの従軍チャプレンの存在が、国教会と非国教会との関係改善を促したとも言われている⁽³⁾。

この第一の戦争論のポイントは、当時の英国におけるいわゆる世俗化が、神の裁きとしての戦争を誘発したと考える点である。本論では、このいわば「懲罰理論型」の戦争論を便宜上「A型戦争論」としておく。「A型戦争論」を前提として、神の罰としての戦争に抗うことはせずに、犠牲としての若者を兵士として出兵するように求めた聖職者もいた。Ingramはそのような論者の代表的な人物であった。イングラムは、「ロンドン公共道徳協議会」という宗派間組織に関わり、不道徳防止のために活動していた。しかしながら、当時の社会には依然として不道徳が蔓延していた。第一次世界大戦中の1915年11月24日、当時ロンドン教区主教であったイングラムが教会内外からの批判に応じて大規模な会議を開催した。これが実質上、「悔悛と希望の国民伝道」運動の端緒ともなつたとされている。ここには国民のみならず教会への内省批判の要素も含蓄されている。このように当時の英国には開戦当初からこのような悔い改めの必要が訴えられていたことが確認できる⁽⁴⁾。

他方、「A型戦争論」に反対の立場もあった。Hastingsは、戦争が神の裁きでも、懲罰でも、罪でもなく、国民が当時提示した「最もふさわしい国民的正義の一つ」であるとしている。その他の反対の立場としては、1912年の *Foundations: A Statement of Christian Belief in Terms of Modern Thought* の執筆者の一人としても知られる Streeter である。彼は、懲罰理論が災難に対する突然の恐怖心に誘因されたものであり、戦争の原因を説明するには不適切であると述べている(Martin 1974, 84)。その他

にも、キリスト教社会主義の立場から、戦争の原因を社会における無制限の競争と個人主義の原理の関係性にみた Bull などがある。しかしここでは、それらの人々の間で基本的に共通していると思われる「A 型戦争論」に反対の立場をとる人々として、それらの総称をまとめて「B 型戦争論⁽⁵⁾」としておく。当時の英国社会には、既述のような戦争論が並存していたと言える。

3.2 『キリスト教と戦争』でのテンプルの主張の概略

さて、「A 型戦争論」と「B 型戦争論」を確認したうえで、ここからはテンプルの戦争論の概観に入りたい。彼の戦争論を最もよく表現すると言われるものの一つが、一連の「戦時論集」の第一号として出版された『キリスト教と戦争』である。以下では、拙訳に沿って具体的なテンプルの主張の概略をおさえておきたい。

まずは「注釈」にみるテンプルの前提理解を確認しておこう。彼はその中で、キリスト者同士の戦闘という事態において、福音と現実社会が乖離しているという認識を示している。彼にとっては、『キリスト教と戦争』は当時の人々に、自らの信仰について再考察するきっかけを与えるものであったと言えよう (Temple 1914, 2)。

とはいえ、基本的にテンプルは戦争を肯定する立場に立っている。特に、キリスト者同士が戦闘を行うことに対する嘆きが語られる一方で、英国が国民として宣戦布告したことが正しいとされ、祖国のために参戦することが正義であるとされている点などはそのことをよく表している (Temple 1914, 3)。

さらにテンプルは、ドイツに対する宣戦布告と招集に対して、キリスト者がどのような態度を取ればよいのかについて論じている。テンプルはその前提に、三つの立場を想定している。すなわち、第一に、自らの目的は正義であるとして祖国のために進んで嬉々として戦場に行く人々、第二に、戦争は忌まわしい義務であるとして、陽気さも勝利の歓喜もなく義務感のもとで戦場に行く人々、そして第三に、トルストイなどの

「無抵抗」の教義を信奉する絶対平和主義の立場の人々である。

この三つの立場について述べた後、テンプルは、イギリスの宣戦が正しいものであったが、単にドイツ人のみに責任を帰して自らが正義であると主張するわけではなく、英国人自身の中から「プロイセンの邪悪な気風」を排除する必要性をも訴える。さらにドイツ人のために祈るの必要があり、イングランドは真の信仰を持たなければならないと訴えるのである。

そして、以上の原則に基づいて戦争に伴って生じた様々な問題を扱い、特に国家にキリストの法は適用できるのかどうかを論じ、その適用の必要性を訴える。さらには、悪を阻止するための暴力の使用も正当化しようとして、キリスト者が戦争に参加する正当性を強調する。そのなかで個人だけでなく国民も神の国に寄与しうることを強調する。そして罪深き人間は、罪深き世界の中ではキリストのように聖なる人生を送ることは不可能であり、人間にはより大きな悪とより小さな悪との間の選択しかないと述べ、絶対平和主義の立場を間接的に批判さえている。

最後に、単に戦争がないという意味での平和ではなく、真の平和のためには、「キリストへの崇敬によってまとめられた単一の国際社会」が必要であると力説し、「聖なる普遍的教会」の必要性を訴えたのである。

3.3 ベイントンの類型論

3.1で「A型戦争論」と「B型戦争論」の類型を確認した。それぞれの特徴を再度確認しておく、「A型戦争論」は、世俗化の波に押し流されていた当時の英国人に対する神の裁きや懲罰として、戦争が誘因されたとする見方であった。「B型戦争論」は、さらに詳細に分類し得るが、便宜上、ここでは戦争の原因を神の裁きとはしない人々の立場の総称とした。

テンプルの戦争論にはこれらと比較してどのような特徴があるだろうか。具体的なテンプルの戦争論の考察に入る前に、戦争論の類型として周知されている Bainton の三つの類型論を簡単に取り上げたい。多様な

戦争観に見通しを与えるための思考軸として、キリスト教史の中で現れてきたこれら三つの類型をみることでテンブルの戦争論がより明確になると考えるからである。

ベイントンの戦争論の類型は、(A) 絶対的平和主義 (pacifism) (B) 正戦 (just war) 論 (C) 聖戦 (crusade/holy war) 論である (ベイントン 1963, 5)。結論から言えば、後で明らかになるように、テンブルの戦争論はベイントンの類型にある (A) 絶対的平和主義や (C) 聖戦論ではない。ここでは、Fletcher の指摘に注目したい。それによれば、テンブルはベイントンの類型でいう (B) 正戦論の立場である。テンブルは①合法的な政府が戦争を行い②問題となっている紛争を解決する他のすべての方法が失敗したか、実行不可能であり、③戦争の悪を凌駕する十分な善を得ることができ、それによって目的が手段を正当化することができる」と正直に確信した場合、キリスト者は良心的に戦ったり、兵役に服したりすることができる、と考えた (Temple 1936, 83)。フレッチャーはこの点において、テンブルがドイツとその同盟国との二度にわたる世界大戦において英国の正当性を主張することができた」と指摘している (Fletcher 1963, 221)。第一次世界大戦開戦時、テンブルはセント・ジェームズ教会の主任司祭に就任したばかりであった。テンブルの伝記者で著名な Iremonger によれば、セント・ジェームズ教会での彼の説教は、単なる戦争を賛美するものではなかった。それは、既述のとおり、戦争を「聖戦」として捉え、教区民の若者に積極的に出兵を求めるものとは一線を画していたとも言われる (Iremonger 1948, 167-173)。以上のことからわかるように、テンブルは基本的に正戦論の立場を取りつつ、英国の戦争を正当化していったのである。

3.4 テンブルの戦争論

ここまでベイントンの類型を簡単に紹介し、それと比較してテンブルの戦争論をみてきた。ここからは『キリスト教と戦争』の分析に戻って、彼の戦争論をもう一度検討したい。本書において第一に考えなければな

らないことは、templが宣戦布告を正当化したこと、第二に絶対的平和主義の立場を批判したことである。そして、特に本文の11頁-12頁には、悪を阻止するために使用する暴力をも正当化し、英国のキリスト者が戦地で戦って自らを正義としていることを、追認しているようにみえる記述もある。では、そもそも戦争の原因について彼はどう考えるのか。

結論から言えば、templの戦争論は基本的に「B型戦争論」である⁽⁶⁾。templは次のように述べる、「我が国民が戦争を宣言したのは正しく、国民の呼びかけに応じて戦っている人々は正義のために戦っており、兵士になる以外に奉仕する方法のない正義なのである」(Temple 1914, 3)。ここで述べられている、いわば「正義のための奉仕」は重要である。なぜならば、「注釈」でも述べられているとおり、「祖国を愛するすべての人々の希望は、祖国の危急時に祖国に奉仕することであり、また、祖国への奉仕の中で死んだ人々が無駄死ににならないように、生きて労働すること」という考えがtemplの根底にあるからである。ここでは出兵が神の裁きとして消極的に捉えられていない。それは、懲罰ではなく、むしろ奉仕という枠組みの中で積極的な意味付けがなされていると言えよう。

さらにtemplの特徴を明確にするため、templを「B型戦争論」者としたとき、何をもって「A型戦争論」者と異なるのかを明確にした方がよいだろう。すでに述べたように、ラッシュドールは戦争に対する積極的な意味づけとして、懲罰ではなく「国民的正義」をその根拠に置いた。ひるがえって、templの場合はどうだろうか。彼は戦争の原因が「人間の意志」の中にあると断言する。さらに言えば、彼にとって戦争は、「罪ある世界の裁き」や「戦争の原因となる罪—程度の差はあるが、世界中のすべての人間が犯した個人または国民の利己心という罪に対する裁き」である(Iremonger 1948, 173-174)。このようにtemplは戦争の原因が個人または国民の「利己心」に見出した。templは、決して性善説的人間観では語れない「人間の意志」というものが戦争を誘因

した根本にあることを指摘している。

さらに重要なのは、『キリスト教と戦争』の結部にある普遍的教会への言及である。上記でみたような戦争論を保持していたテンブルは必ずしも絶対的平和主義者ではなかった。その意味では、やはり時代の子として様々な限界を持ち得た存在であったと言える。しかし、彼は、普遍的教会の必要性を訴える。これは、「キリストへの崇敬によってまとめられた単一の国際社会」であり、この国際社会は「その構成員をその国際社会に結びつけることによって、キリストの理想に少しでも近づき、自分たちの祖国を彼らと共に歩ませようとする彼らの希望を大いに助ける」ものとして措定されている。そして、教会は、戦争にありながら「敵に対する名誉」、「寛大さ」、そして「愛」というキリスト教の諸原則が忘れられないように努めなくてはならないと言う。事実、テンブルは敵である「ドイツ人」のために祈ることを要請しているのである (Temple 1914, 10)。

これまでみてきてわかるように、テンブルは当時の戦争がキリスト教の精神に反すると考えていたことがみえてきた。しかし、国際情勢の悪化とともに、戦争の大義を見出す中で戦争肯定の態度をとっていく。同時に、彼は「普遍的教会」や「キリストへの崇敬によってまとめられた単一の国際社会」という言葉に象徴されるような未来への希望や期待を抱いていたようである。これらの一見矛盾したような彼の主張は確かに、サゲートもいうように「不満足な並置」(Suggate 1987, 176)であって、国際政治に関する理想主義と神の国の実現という教会的な理想主義との関係性については、さらに慎重に検討しなければならない。

4. 結論

これまでテンブルの『キリスト教と戦争』を基にテンブルの戦争論を概観してきた。当時の戦争論を「A型戦争論」と「B型戦争論」に大別し、テンブルのそれを「B型戦争論」であることを指摘した。また、ベイントンの類型論をもとにテンブルが正戦論を保持して、英国の戦争を

正当化していった背景を確認した。

本論では『キリスト教と戦争』を主なテキストにしたため、彼の戦争論を十分汲み尽くせたかは心もとない。しかし、第一次世界大戦当時の英国の状況と、テンブルの戦争論の一面を垣間見ることはできたのではないだろうか。

もとより、テンブルの戦争論についてはさらに様々なテキストを詳細に検討しなければならない。特に、神学的な側面から、テンブルに看取される受肉論と贖罪論の神学的な強調点の推移などにはあまり言及できなかった。それらの神学的な詳細の考察は別項に委ねることとしたい。

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程一年 かわしま・そうし)

注

- (1) 「悔悛と希望の国民伝道」運動や「生活と自由」運動については Lloyd の研究を参考にした (Lloyd 1966, 226-238)。
- (2) この従軍チャプレンによる報告が「悔悛と希望の国民伝道」運動につながった要因の一つと言われている。開戦当初、若い聖職を中心にチャプレンとして参戦した者が多くいた。その任務としては、野外礼拝、負傷者の世話、戦死者の葬儀、さらに、兵士の手紙の代筆など多岐にわたっていた。彼らは、戦場で兵士と関わるなかでキリスト教信仰の欠如を見出していくことになる。ちなみに、1914年にはアングリカンのみならず全ての教派を含めた従軍チャプレンの数は113人だったのに対し、1918年までには3,480人にまで増加している。この内、1,937人がアングリカンの聖職であった。戦間期において、アングリカンの聖職は3,030人がチャプレンに任命され、その内、88人が戦死したとされている (Bell 1935, 848-850)。
- (3) Garbett は二十世紀初頭の国教会と非国教会の関係改善を促したものとして、国民の一体感、世俗主義というキリスト教にとって共通の敵の出現、さらに従軍チャプレンの前線での協力関係を挙げている (Garbett 1948, 245-246)。
- (4) 1915年11月24日の会議においてイングラムは以下のことを確認していた。

「①現在の緊急状況は、戦争における神の召命を国民に知らせるために、教会による以下のような特別な行動を要求している。(a) 神の前での国民の責任を理解すること (b) 世界中でキリストの王国に仕える準備を新たにしなければならないという国民の義務を認め、その目的のために (c) 国民自身の生活の中から正義に反対し兄弟愛を妨げるようなことを排除すること。

②この行動のための準備として、教会の目が覚めるような以下の努力がされなければならない。(a) 十字架にかけられ復活し、昇天したキリストは現在の生活の支配者であると教会が宣言することの偉大さを理解すること (b) 教会が聖霊の力で新たに満たされること、またその目的のために (c) 交わりを妨げ、礼拝と証を偽りのものとしてしまうような

こと全てを、教会生活のあらゆる領域から積極的に排除すること」(Thompson 1983, 341)。

- (5) これらの戦争論の背景については、Martin (Martin 1974, 80) や Wilkinson (Wilkinson 1978, 109-135) を参考にした。
- (6) 本論では主として『キリスト教と戦争』を資料として用いたため、そのほかの資料にあえて言及していない。しかし、テンブルが「B型戦争論」の立場であることを示すものは多数ある。たとえば、1916年2月に当時テンブルが勤務していた教会での説教である。そこで彼は、特定の罪を犯したとして人々を裁くために神が意図的に戦争を引き起こしたかのように語っているのを多く聞くと述べている。そして、当時の英国における、酒浸りや性犯罪あるいは安息日違反のような特定の罪や失敗に対する罰として、神が全ての戦争の苦悩をこの世界に意図的に持ち込んだという意見も散見されると、国内の戦争誘因論について整理している。そのうえでテンブルはそれらの意見について、「私はあえてそれは全くの迷信であると主張する」と断言する (Iremonger 1948, 173-174)。

参考文献表

- ・ William Temple. 1914. Christianity and War. London: Oxford University Press.
1936. Christianity in Thought and Practice. New York: Morehouse-Gorham.
- ・ Albert Martin. 1974. The Last Crusade: The Church of England in the First World War. Durham: Duke University Press.
- ・ Allan Wilkinson. 1978. The Church of England and the First World War. London: SPCK.
- ・ A. M. Suggate. 1987. William Temple and Christian Social Ethics Today. Edinburgh: T and T Clark.
- ・ C. Garbett. 1948. The Claims of the Church and England, London: Hodder and Stoughton.
- ・ D. M. Thompson. 1983. “War, the Nation, and the Kingdom of God: The Origins of the National Mission of Repentance and hope” in W. J. Sheils, The Church and War: Papers read at the Twenty-First Summer Meeting and Twenty-Second Winter Meeting of the Ecclesiastical History Society, New York: Basil Blackwell.
- ・ F. A. Iremonger. 1948. William Temple: Archbishop of Canterbury His Life and Letters. London: Oxford University Press.
- ・ G. K. A. Bell. 1935. Randall Davidson, Archbishop of Canterbury, Vol II,
- ・ J. F. Fletcher. 1963. William Temple : Twentieth-Century Christian. New York: Seabury Press.
- ・ John Kent. 1992. William Temple: Church, State and Society in Britain, 1850-1950. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Roger Lloyd. 1966. The Church of England 1900-1965. London: SCM Press.
- ・ 井上治、2005、「戦間期イギリスにおけるエキュメニカル運動とウィリアム・テンブル」『史林』、88号、879-911頁。2004、「イングランド国教会における教会観の変化 一八八九—一九二四年：キリスト教社会連合とウィリアム・テンブル」『史林』、87号、642-675頁。
- ・ バイントン、ローランド、H. 1963『戦争・平和・キリスト』中村妙子訳、新教出版社。
- ・ 吉田正広、2006、「第一次世界大戦期イングランド教会における『悔悛と希

望の国民伝道』『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』、21号、61-81頁。
2005、「第一次世界大戦期におけるイギリス国教会の戦争認識－ウィリアム・テンブルの認識を中心に－」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』、19号、63-84頁。2005、「戦争とイギリス国教会－ウィリアム・テンブルの活動を中心に」松本彰・立石博高編『国民国家と帝国－ヨーロッパ諸国民の創造』山川出版社、214-243頁。